

希望を取り戻すとき

「早よう元気になって、これを見に行こうや！」入院中の私を見舞ってくれた昔の同僚が差し出したものはヒマラヤン・ポピーの写真だった。彼は何度もヒマラヤを旅行しており、彼が撮ったものだ。

生まれて初めての入院が脳梗塞、お粥を食べても、歯を磨いても、マヒした口の中のものたらたらと流れた。瞳孔もマヒしており、活字は勿論、病院の廊下を歩くのも不自由で、車の運転はもう無理かもしれぬ、それどころか再び教壇に立てないかも…、などと私は悲観的であった。五十五歳のときのことである。

…入院中の私は、何度もこの写真を見つめた。よく見えない目で…。そして悲嘆にくれていた私の心がしだいに癒されていったのを思い出す。

私を見舞うとき、どんな思いでこの写真を選び、プレゼントしてくれたか、彼のその気持ちがよく分かったからだ。そして、この花と、その向こうに輝くヒマラヤの山々への憧れが、絶望に閉ざされた私の心をしだいに開いてくれたような気がする。

「生きることに何の意味もない」としか思えぬときが、誰の人生にもあるのかもしれない。

しかし、たとえ当人が「人生に何の意味もない」と確信していたとしても、未来には自分との出会いを待っている「人と仕事」があるのだと諸富祥彦さんが書いておられる。つまり生きる意味は、自分の内側に探して見出せなくとも、人生の方から与えられるものだということである。『生きる』この意味』PHP新書

星野富弘さんは、教師になった年の夏、公務中の事故で障害者になられた。首から下が麻痺した身体で生きる自分の姿を考えたとき、真剣に自殺を考えたという。しかしやがて、口に筆をくわえて詩や絵を描く幸せを見出される。

星野さんの描いた詩画は、その後多くの詩画集として出版され、カレンダーとなり、星野富弘美術館さえ設立されそこでも展示されることになる。

「私は生きることに疲れたとき、この美術館にやってきました。そして星野さんの作品に出会っていつも元気になります」…この美術館に置かれたノートに、こんな感想が多いと聞いている。

「こんな人生、何の意味もない」…星野さんもそう

思ったに違いない。しかし、繰り返すが、意味は心の中からでなく、絶望の向こう側からやってくる。

思わぬ運に遭遇したとき、私たちは「どうしてこんな目に遭わなければならぬの？ 私がどんな悪いことをしたというのだ」という気持ちになりやすい。そして何者かに対する怨みや憎悪にとらわれる。

「もう少しまともな親に育てられていたら…」「あのときいじめられなかったら…」「あのとき担任が自分の気持ちを分かってくれていたら…」などと人を怨み、そして、自分がこの世に生まれてきたことさえ恨みたくなる。こういうとき前向きに生きようとしてもエネルギーがわき上がってこない。「生きていても何の意味もない」と思えるのはそんな時である。

私は日頃から、人間は「意味」を求める生き物だとつくづく思っている。よほどつらいことでも、自分がやっていることにこんな意味があると思えると耐えられる。しかし、無意味にしか思えなければ、どんなに些細な課題にも挫折するのが人間だ。学校カウンセラーとして多くのケースを経験すればするほど、「やはりそうだ」という気持ちになる。

ところで、絶望の縁（ふち）にある星野さんに「希望」を与えたものは何か？ この文章を書きながら、私は改めてこの疑問にとらわれている。この疑問を大切にしながらもう一度彼の作品を読み直してみたい。

ポピーの写真をくれた彼の話によると、夏の間は、ヒマラヤの山々は中国側からしか見えないという。

ネパール側、またはインド側では雨が多くほとんど曇っている。インド洋から押し寄せる湿った大気がそのような気候の原因である。ところでポピーは夏に咲く花であるから、ポピーとヒマラヤの山を同じトレッキングの途中で見ることは難しいとのことである。

チョモランマに会いに行くか、ポピーに会いに行くか、ここは難しい選択である。いずれにせよ、私の人生に、まだヒマラヤに行く機会が与えられているのは嬉しいことである。

二〇二二年五月

森口 章（学校カウンセラー）

